Ⅳ　愛知県図書館の歩み

昭和 27（1952）年 4 月	講和記念事業文化施設基本計画樹立委員会設置
昭和 34（1959）年 4 月	愛知県文化会館愛知図書館開館
平成 3（1991）年 3 月	愛知県文化会館愛知図書館閉館
平成 3（1991）年 4 月	愛知芸術文化センター愛知県図書館開館
平成 6（1994）年 4 月	宅配便による市町村図書館との間の資料搬送を開始
平成 11（1999）年 3 月	特許公報類地方閲覧所の指定解除
平成 12（2000）年 3 月	移動図書館（ブックモビル）の廃止と貸出文庫の開始（4 月）
平成 13（2001）年 3 月	インターネット蔵書検索の公開
平成 14（2002）年 4 月	ＡＶ（視聴覚）資料の貸出開始、図書貸出を 3 冊 15 日から 6 冊 22 日に
平成 15（2003）年 1 月	県内公共図書館横断検索システム「愛蔵くん」の公開
平成 17（2005）年 3 月	貸出返却業務の 1 階カウンターへの集中化とレファレンス体制の強化、ビジネス情報コーナー、ティーンズコーナーの設置
平成 18（2006）年 3 月	多文化サービスコーナーの設置
平成 19（2007）年 3 月	インターネットによる貸出中図書予約、利用状況照会の開始
平成 22（2010）年 1 月	貸出中ＡＶ資料の予約受付開始（本格開始 4 月）

Ⅴ　平成 22 年度の主要な事業動向

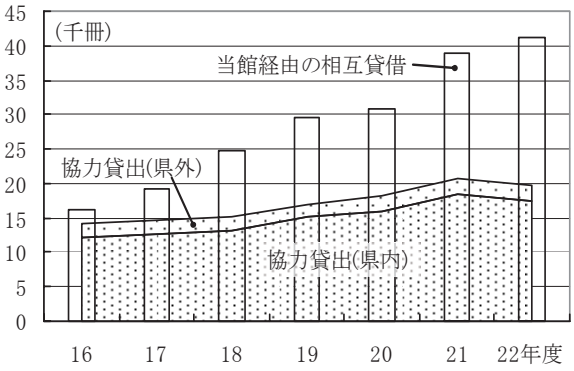
1　市町村立図書館等を介したサービスの状況

(1) 協力貸出、市町村立図書館間の相互貸借

22 年度のサービス計画では、前年度に続き、特に重点をおいて取り組むサービスの一つとして、「市町村立図書館と連携し、県図書館の資料を全ての県民に届けます。」を掲げ、その目標値を「協力貸出冊数＋県を経由した借受冊数 60,000 冊（前年度比 105%）」とした。

22 年度の県内図書館への貸出冊数は 17,530 冊（同 95%）、県を経由した借受冊数は 41,103 冊（同 106％）で合計 58,633 冊（同 102%）となり、目標を若干下回った。県外図書館への貸出冊数は 2,065 冊で 21 年度の 2,263 冊に比べ 9%減少した。

協力貸出と当館を経由する相互貸借の冊数推移



(2) 市町村立図書館に対する人的サービス

図書館の設置や新館の建設を検討する市町村に対し、情報の提供や職員の参画を含めた支援を行っている。現在、県内唯一の未設置市である清須市において図書館設置の動きが進み、他館事例の情報提供やアドバイス等を行った結果、23 年度に図書館整備に着手し、24 年 7 月開館（予定）の運びとなった。

また、市町村立図書館支援の一環として県内各団体主催の研修会へ職員を講師として派遣した。22 年度は県内で実施された研修会等へ延べ 3 名を派遣したほか、県外へも 1 名を講師派遣した。

(3) 大学図書館、高校図書館等との連携

愛知、岐阜、三重、静岡県内の公立図書館と大学図書館による館種を超えた連携・協力を進めるために設立された東海地区図書館協議会に理事館として参加している。同協議会の「資料相互利用協定」参加の大学図書館に 404 件の資料を貸し出した。また 80 件の資料を借り受け、3 件の複写依頼を受けた。

名古屋大学、名古屋市立大学、南山大学の図書館と愛知県図書館の間で、18 年 5 月から開始した定期搬送便の実証実験を 22 年度も継続した。この搬送便を利用した公立図書館から大学図書館への貸出は 673

冊(前年度比 125%)、大学図書館からの借受は 288 冊(同 182%)となり、貸出・借受ともに増加した。21 年度に公立図書館の大学図書館からの借受は、初めて前年度を下回ったが、1 年で大幅に回復し、20 年度と比較しても 133%の伸びとなった。

高等学校を中心に、学校図書館への支援サービスを引き続き実施した。うち高等学校への協力貸出冊数は 2 校 58 冊であった。

2　来館者サービスの状況

(1) 入館者、貸出、レファレンスサービス等の状況

開館日は、前年度より 1 日少ない 282 日で、入館者は 702,187 人に留まり、前年度から 2.8%減少した。1 日平均で 2,500 人を割り込み、2,490 人となった。資料の個人貸出点数(図書、ＡＶ資料)も、542,187 点で前年度に比べて 1.4%とわずかだが減少した。レファレンスサービスの件数も、38,482 件と前年度を 1.6%下回っている。貸出点数、レファレンスサービスは、19 年度以降 10%前後の大幅な伸びを示してきたが、踊り場に差し掛かったものと考えられる。入館者数は前年度から減少傾向を示しているが、貸出中資料の予約がインターネット予約を開始してから毎年 40%以上増えており、確実に資料が確保できるのを確認して来館されるなど、利用方法の変化がうかがわれる。

レファレンスサービスでは、昨年度から作成をはじめた「調べ方ガイド」の利用が順調に伸びた。4 点をさらに追加し、総配布枚数は 4,910 枚と予想をはるかに上回っている。

なお、3 月 11 日に発生した東北地方太平洋沖地震や原子力発電所事故により関東・甲信越・東北地方から一時避難された方に資料の貸出を行うため、愛知県内への避難者を対象に在住・在勤要件を緩和して利用カードの発行を行った。3 月 25 日から 31 日までの間に児童 10 名、一般 5 名の登録があった。

(2) インターネットを利用したサービス

インターネットによる貸出中資料への予約の利用は、前年度比 48%増と高い伸びが続いている。カウンターでの予約も 12%と増えているが、インターネット予約が予約全体の 57%を占めるようになった。

ホームページ（ＨＰ）のトップページへのアクセス 619,995 回(前年度比 110%)、横断検索「愛蔵くん」へのアクセス 381,586 回(同 107%)、携帯サイトの総ページビューは 162,094 ページ(同 116%)といずれもよく利用されているが、蔵書検索ページのアクセス数は 264,465 回(同 81%)と大きく減少した。19 年度の 337,056 回をピークにアクセス回数が減少傾向にあったが、昨年度の落ち込みは目立つものとなった。理由として、アクセス回数は蔵書検索の入力画面でカウントしており、横断検索「愛蔵くん」や携帯での検索などＨＰの入力画面を経由しない場合はカウントされないことが原因と推測される。横断検索「愛蔵くん」には、図書館を持つ全市町村(47 自治体)と県図書館をはじめとする 4 県機関が参加しており、個別の蔵書検索の手間が省けることから人気が高い。また、若年層を中心に携帯での利用が増加している。さらに、パソコンやスマートフォンで、複数の任意の図書館の蔵書を検索できるアプリケーションが開発され無償配布されており、それらを利用する人も増えている。これらの要因により、蔵書検索のアクセス回数が減少したものと考えられる。

(3) 児童に対するサービス

利用者の関心を高めるために、新着図書やおすすめの図書を別置している。また、「戦争・平和を考える」「生誕 100 年　レオ＝レオニ、赤羽末吉」など 2 か月ごとにテーマを変えて関連図書の展示と貸出を行った。ほかにもタイトル順や対象年齢別など請求記号順とは別のルールで配置している資料が多数あるため、資料配置図と検索結果レシートの見方を説明した探し方案内（A4 判両面）を作成しカウンターに備えた。発行物では、新着図書を紹介する『新しく入った本』(月刊)、おすすめ本を紹介する『児童室だより』(季刊）のほか、21 年度から対象別のおすすめ本リストを作成、配布しており、22 年度は『5・6 歳向けおすすめ絵本』と『小学校 1・2 年生向けおすすめ図書』を発行した。

おはなし会は、午前を幼児向け、午後を小学生向けとして、年間 22 日 44 回行った。ほかに夏休み中のイベントとして、8 月 3 日と 4 日に夏のおたのしみ会を行った。小学生向けでは実験や工作を行い、関連

図書を紹介した。児童図書の貸出冊数は前年度比 102%の 89,592 冊であった。

(4) 障害者に対するサービス

視覚障害者への対面朗読の実績は、特定の常連利用者の動向に左右される面もあり、大幅に利用が伸びた前年度よりも減少して、利用者数 391 人（前年度比 74%）、対応した朗読者数 319 人（同 103%）、朗読時間数 453 時間（同 56%）であったが、一昨年度に比べると依然として高い数字を維持している。

視覚障害者資料の貸出は、自館資料が 1,230 タイトル（同 99%）、他施設から借り受けて提供したものが 1,904 タイトル（同 91%）であった。作成した録音図書のタイトル数は、カセットテープ 3、ＤＡＩＳＹ（デイジー）73 である。既蔵カセットテープからＤＡＩＳＹへの変換も進めた結果、他施設からの申込みが 595 タイトル（うちカセットテープ 18）あり、前年度比 211％と急増した。『視覚障害者資料室新着図書案内』は第 4 号を発行した。

心身障害者への郵送貸出は、やはり常連利用者の動向に左右される面があるが、貸出数 1,276 点（同 162%）であった。

(5) 各コーナーの状況

ア　地域資料コーナー

地域資料コーナーは、愛知県の人・事物について書かれた資料、県内行政刊行物、その他愛知県に関する資料の幅広い収集を目指し、22 年度末現在、図書 66,606 冊、雑誌 1,203 タイトルを所蔵している。

イ　ティーンズコーナー

ティーンズコーナーは 17 年 3 月から運用を開始し、蔵書は約 6,300 冊となった。ヤングアダルト向けの図書の充実とともに、「てこぽん」（おすすめの本のＰＯＰと図書館グッズを交換できる利用者参加型企画）の実施や、企画展示の開催、愛知県内の高校･大学が発行した学校案内のコーナーを設置するなどのサービスを行っている。

ウ　多文化サービスコーナー

多文化サービスコーナーは 18 年度の本格運用から 5 年を経過し、安定した利用が続いている。図書資料は実用書、文学を中心に中国語・ハングル・ポルトガル語の新刊書を購入、22 年度末現在の資料数は約 4,000 冊となっている。また、日本語学習用の資料も積極的に収集しており、この分野は特に利用が多い。22 年度から各言語での利用案内と新着図書の一覧をホームページ上で見られるようにした。新聞・雑誌については、現在新聞２紙（中国・ハングル各１紙）とポルトガル語のフリー雑誌を１点受け入れており、共によく利用されている。

エ　ビジネス情報コーナー

「営業力ＵＰ」、「職業・資格の本」、「職場のメンタルヘルス」、「海外進出～中国編～」、「上司・先輩になったら」のテーマに関連する図書の展示と貸出を行ったが、よく利用された。また、職業人によるセミナー「プロフェッショナル仕事図鑑」は「第 10 巻　警察官」と「第 11 巻　アナウンサー」を開催し、将来の職業を考える高校生、大学生の参加もみられた。また、3 年連続となる日本政策金融公庫との共催行事として、展示「あいちの起業家応援フェア」と講演会「創業・経営支援セミナー」を開催したが、いずれも盛況であった。

オ　国連寄託図書館

愛知県図書館は平成 3 年の開館以来、国連寄託図書館として国連から資料の寄託を受け、資料の公開を行ってきたが、22 年度限りでその指定が解除された。国連資料の多くがインターネット上で閲覧できるようになり来館利用者が減少していることなどを踏まえ、愛知県図書館から国連本部に指定解除を申し出たものである。なお、これまでに国連から寄託を受けた資料は引き続き当館で利用することができる。

カ　特許資料

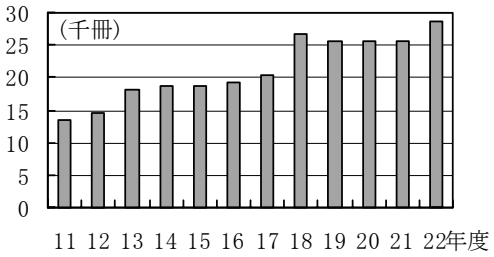
特許庁が進めている特許情報のインターネット公開事業の充実に伴い、特許資料の閲覧を 23 年 3 月末日をもって終了した。

3　資料の収集

(1) 図書の収集状況

22 年度は、合計 28,564 冊の図書を受け入れた。その内訳は、購入による受入が和書 18,875 冊、洋書 162 冊、計 19,037 冊。寄贈による受入が和書 8,813 冊、洋書 214 冊、計 9,027 冊。県関係他施設からの管理換えや貸出文庫用図書からの管理区分の変更による受入が 500 冊である。寄贈、管理換えのうち 5,436 冊は、愛知県勤労会館労働図書資料室の廃止に伴って受け入れたもので、図書の整理・装備作業には、22 年度緊急雇用創出事業基金事業を活用して行った。全体の受入冊数は昨年度並で、18 年以降 5 年連続して 25,000 冊程度の水準を保っているが、備品費の削減により、高額の図書の購入を厳選した。

図書受入冊数の推移



(2) 新聞雑誌の状況

労働図書資料室から労働関係を中心とした雑誌・新聞 6,099 冊（主に製本雑誌）の移管を受けた。これにより既蔵雑誌の欠号部分の補充や新規雑誌の受入れなど労働関係資料の充実を図ることができた。また、請求記号ラベルの貼付など移管資料の装備は、図書と同じく緊急雇用創出事業基金事業の活用により完了した。

(3) ＡＶ資料の収集状況

映像資料 371 点と録音資料 245 点を受け入れた。内訳は、ＤＶＤ361 点、ビデオテープ 10 点、ＣＤ243 点、カセットテープ 2 点であり、購入と寄贈の別では、購入 427 点、寄贈 189 点である。録音資料では前年度に引き続き、利用者より要望の高い朗読ＣＤなど文学・講演の分野の充実を図った。映像資料では、ＣＯＰ10 やあいちトリエンナーレの開催にちなみ、比較的所蔵の少なかった自然科学分野と芸術分野の充実を図った。

(4) 貴重和本のデジタルライブラリー化

貴重和本のデジタルライブラリー化を 22 年度に行った。当館には、文化会館時代に当時の文書課から移管された尾張藩関係資料をはじめ、近世から明治初期にかけての貴重な資料が多数所蔵されているが、『国書総目録』に掲載されていないことから、これまであまり存在を知られていなかった。この貴重な資料群を公開し利用に供するため、緊急雇用創出事業基金事業として行うこととした。近世期の地域資料を中心に 53 タイトルをデジタルデータ化し、23 年度中にはインターネットで一般に公開する予定である。

4　図書館サポーター

(1) おはなし会

22 年度におはなし会のサポーターとして登録された方は 17 名で、毎月第 1 日曜日と第 3 土曜日及び夏のおたのしみ会では、読み聞かせや紙芝居、手遊びなどを行っていただいた。

(2) 資料補修

破損・汚損した図書の補修を行う資料補修サポーターには、2 名の方に登録していただいた。新たに参加された方は当館の非常勤嘱託として永く勤め、補修作業に精通していることから、補修作業全般にあたっていただいた。

5　県内図書館の動向

23 年 4 月 1 日現在、愛知県内の市町村は 54、図書館設置市町村は 47（34 市 12 町 1 村）、未設置市町村は 7（1 市 5 町 1 村）で、図書館設置率は 87%である。県内市町村立のすべての公立図書館がＡｉｃｈｉ・ＬＬネットに登録している。

県内で指定管理者制度を導入している図書館は、新城図書館、幸田町立図書館、江南市立図書館、津島市立図書館、あま市美和図書館、蒲郡市立図書館、常滑市立図書館、知多市立図書館、高浜市立図書館、

の９館で、そのうち新城図書館、江南市立図書館、津島市立図書館は22年４月から第２期目（いずれも事業者変更なし）に入った。

６　県図書館団体等の動向

(1) 東海北陸地区公共図書館研究集会

22年11月25日、26日の２日間、当館大会議室を会場に東海北陸地区公共図書館協議会と愛知県図書館の共催で、「平成22年度東海北陸地区公共図書館研究集会」を開催した。研究主題を「障害者サービスを拡げるーすべての人にすべての図書館サービスをー」とし、22年１月の「著作権法」の改正により、図書館で可能になったこと、そして期待されることについて、埼玉県立久喜図書館の佐藤聖一氏の基調講演と、名古屋市鶴舞中央図書館、四日市市立図書館、枚方市立中央図書館からの事例報告とパネルディスカッションを行い、東海北陸地区６県から91名の参加があった。

(2) 愛知県公立図書館長協議会

ア　ヤングアダルトサービス連絡会

20年に設置された「ヤングアダルトサービス連絡会」は、22年度総会を９月30日に日進市で開催した。総会では広島県立図書館の正井さゆり氏を招いて、広島県立図書館のＹＡサービスについての報告を受け、続いて、名古屋市、犬山市、田原市から各館でのＹＡサービスの事例報告、最後に参加者による情報交換が行われた。その他の活動として、インターネットを利用した情報交換の場としての「ＹＡ掲示板」、また、「ＹＡ向け図書館活用リーフレット」の検討を行った。

イ　図書館ネットワーク研究会

「図書館ネットワーク研究会」は、「県内公立図書館資料の保存システム」「県内公立図書館資料の物流システム」「県内公立所蔵データ等の情報システム」「その他図書館ネットワークと協力に関すること」の４つを研究テーマとして22年に設置された。22年度は、「県内図書館資料保存システム」についての検討を行い、県内公立図書館における希少資料確定のための電算プログラムの仕様を確定し、愛知県図書館に電算プログラムの開発を依頼した。３月までに、研究会委員所属館からＩＳＢＮデータの提供を受け、プログラムの稼働実験を行い、概ね良好の結果を得た。

ウ　平成22年度に愛知県公立図書館長協議会の実施した研修は、次のとおりであった。

第１回　「利用しやすい図書館のつくり方」（講師：前田原市図書館長　森下芳則氏）

第２回　愛知図書館協会児童サービス研修公開講座「児童サービス概論ー児童サービスの仕分け方ー」（講師：子どもの読書のコーディネーター＆ストーリーテラー　佐藤凉子氏）を共催した。

第３回　「国立国会図書館の電子図書館・デジタルアーカイブ事業」（講師：国立国会図書館関西館電子図書館課長　大場利康氏）

第４回　「チームで現場の課題を解決する」（講師：静岡大学客員教授　平野雅彦氏）

(3) 愛知図書館協会

愛知図書館協会が実施する研修は連続受講形式で、講義と演習の組み合わせを原則としている。22年度に実施した研修は次のとおりであった。

ア　児童サービス研修：全４回の連続受講形式。このうち「児童サービス概論ー児童サービスの仕分け方ー」を愛知県公立図書館長協議会との共催とし、公開講座とした。

イ　レファレンスサービス研修　全４回の連続受講形式。このうち「レファレンス記録の活用法」（講師：千葉経済大学短期大学部准教授　齊藤誠一氏）、「インターネットを活用したレファレンス」（講師：実践女子学園情報センター　伊藤民雄氏）、の２回を公開講座とした。

ウ　広報研修：「パソコンでチラシを作ろう」（講師：アートディレクター　伊藤勇吉氏）　講義と実技を組み合わせた研修。

エ　ＩＴ研修：愛知淑徳大学の協力を得た、講義と実習を組み合わせた２日間の研修。